

第2回

有吉佐和子文学賞

入賞作品集



有吉佐和子と和歌山市



有吉佐和子（一九三一—一九八四）は、昭和六年一月二十日に和歌山市に生まれました。海外でも幼少期を過ごし、八歳で帰国した際に見た青い紀の川の美しさに感動し、二十年後に小説「紀ノ川」を発表。他にも「助左衛門四代記」「華岡青洲の妻」など、ふるさと和歌山を舞台とした多くの作品を著しました。また、社会派小説「複合汚染」「恍惚の人」や歴史小説「和宮様御留」、ミステリー「悪女について」「開幕ベルは華やかに」など、創作活動は幅広いジャンルに及びました。さらに、その多才ぶりは小説にとどまらず、ルポルタージュや演劇の脚本・演出等広く才能を発揮し、いずれの分野においても高い評価を受け、一時代を築きました。

和歌山市では、有吉佐和子記念館の開館を契機に、本市の偉人である作家・有吉佐和子の顕彰に加え、文学について学ぶ機会を提供すること及び本市の文化的風土を醸成することを目的として、令和五年十二月に、塚本治雄基金を活用させていただき、有吉佐和子文学賞を創設しました。

本文学賞では、有吉佐和子のように一つのテーマにとらわれることなく、自分自身のこと、世の中のこと、和歌山への想いなど、思ったまま、感じたままに表現したエッセイを募集し、第二回目の今回は、全国から一五二作品もの応募をいただきました。

本文学賞が、多くの皆様方に創作の喜びや楽しさを感じていただき、有吉作品をはじめとする「文学」の魅力に触れていただく一助になれば幸いです。

ふるさと和歌山のような温かい、そして末永く愛される文学賞となることを願います。

和歌山市

目次

最優秀賞	「節約の幸福論」	和歌山県紀の川市	大木 篤子	……	4	
優秀賞	「父の手を解いた朝」	東京都足立区	峯田 泰彦	……	8	
佳 作	「祖父からの電話」	兵庫県加東市	阿江 美穂	……	12	
	「ほうれん草のゆで汁」	愛知県大府市	井口 元美	……	16	
	「親友の服」	大阪府貝塚市	西村 美香	……	19	
	「なじみ客として想う」	栃木県鹿沼市	藤田 陽一	……	22	
	「父はハナシカ」	大阪府箕面市	矢鳴 蘭々海	……	25	
奨励賞	「私の運命を変えるきっかけ」	茨城県常総市	常総学院高等学校一年	片岡 真悠	……	28
	「当たり前前の歯車を回す」	東京都板橋区	クラーク記念国際高等学校二年	鏑木 花野	……	30
	「いつか必ず言いたい言葉」	和歌山県和歌山市	開智中学校一年	滝本 昇生	……	33
	「引っ越し」	千葉県富里市	千葉敬愛高等学校二年	牧野 乙葉	……	35
	「そのコアラ」	兵庫県加古川市	加古川市立氷丘中学校二年	宮崎 純大	……	37
	「日本のアマルフィにて」	和歌山県和歌山市	和歌山信愛高等学校二年	宮本 紗希	……	40
	「笑顔を一緒に食べている」	静岡県磐田市	角川ドワンゴ学園N高等学校一年	横山 綾乃	……	43

※学校及び学年は応募時点のものです。

第2回 有吉佐和子文学賞 入賞作品集

「節約の幸福論」

大木 篤子

「カッカツ、カッカツ」

草引きをする私の耳に届くいつもの一羽の小鳥の声。冬の渡り鳥ジョウビタキだ。顔を上げるとスイレン鉢の縁で、体をぶるんぶるんさせてこつちを見ている。

「今日も来てくれたね」

私は思わず声に出して言う。オレンジ色の胸毛が美しい。白い斑点が光る。しばらくは、あちこち飛び移りながらも私の目の届く範囲で居てくれるのだ。

ジョウビタキは昨年も来てくれた。人懐っこく手が届きそうなくらい近くまで寄って来てくれるものだから、ずっと見入ってしまう。

田畑の多い私の家の辺りでは、あつと驚く生き物との出会いがある。南天の天辺でヘビが昼寝をしていたり、キジがドアのガラスに映る自分の姿を見ながらあつちこつちと歩いていたり、塀の上をイタチが走って行ったりと。そんな瞬間に立ち会うつと、あく良かった！と思うのである。

若い頃、老いることに不安があった。シミもシワも増え、体は曲がり、仕事も出来なくなる。人生の喜びなんて無いのではないか。衰えはマイナスばかりで得る物など期待できないと。暗い思いは募っていった。

そしてどうです。私は立派に後期高齢者となり、体は想像以上に変わり、電車内ではシルバースーツを勧められる人間になった。

ところが、想像と大きく違うことがあるのである。それは、今も喜びがあるってこと。衰えてもプラスはあることに気付いたのである。若い頃には知らなかった、年老いたからこそ入れる幸せの部屋が存在するのだ。しかも、その数は多い。

まずは、年を重ねると思ひ出の数が増える。例えば、毎日眺めている龍門山のこと。何度も登った。頂上でおせちを食べた。キイシモツケの白い花が風に揺れていた。木苺を見つけてお弁当箱に詰めて帰った。思ひ出は数珠つなぎだ。

次に、お金の代わりに時間持ちになったこと。人生は時間を使つて歩く旅。時間があるということは、心が自由だということ。持ち時間をどのように使うか、その選択肢はすべて自分に委ねられる。

家の前の道は、和歌山市から奈良へ続く大和街道である。私はこの道を東へ四十分程歩いた所にある長田観音まで行くのが好きである。

境内には、真正面に龍門山が眺められる休憩所がある。そこに座り穏やかな稜線を描いて悠然としている龍門山をじっと見る。桜咲く頃はさらなり、雨の時もこれまた良いのである。行きたい時に行きたい所へ足を向ける、この年代の醍醐味。時間持ちは幸せである。

三つ目は、初めてのことがまだいっぱいあること。初めてのスマホ、初めてのセルフレジ、初めてのワイドパンツ。そして、初めてのボランティア。

演劇をしていた経験を生かし、友と三人でチンドン屋『むかしは娘』を立ち上げたのは四年前。初回

は緊張で顔がこわばった。演奏したり、歌やダンス、体操や脳トレを皆で一緒に楽しんだりするのである。物語の読み聞かせやミニ芝居なども取り入れ内容の充実にはげんでいる。年を経ても明るく機嫌良く笑って過ごそう！ と呼びかけたいと思っている。

最後に、老いの厚かましさは利点であるということ。スーパーへ行つて、同じ野菜を見つめる隣の人と話ができる。

「これ、どないして食べますのん？」

「ゆでてゴマ振り掛けたらどうやる」

「買います？」「こうてみよか」

見ず知らずの人と昔からの知人であるかのように会話できるのが、おもしろい。

しゃがんだ足元の草を思いつ切り引つ張った。尻もちをついてつかんだ草の根っこから、蛙がぽかんと出て来た。ヒヤーと驚く私を横目に蛙は、よくもじゃまをしてくれたなと言うようにヨロヨロ這い出て来た。冬眠していたらしく体が思うように動かない。その歩く姿がおもしろくて笑ってしまう。

年寄りの毎日は最高である。人生で今が一番好きだと言い切れる。

軽く伸びをすればひんやりした空気、小さな畑には自作の野菜。そうだ、この菜花で和え物を作ろう。春の苦味は季節の先取りだ。仏壇にもお供えしよう。母はこれが好きだったな。

鳴き声がしなないと思つたら、ジョウビタキはいつの間にか居ない。空想にふけっている私に愛想を尽かしたのかもしれない。

菜花を握りしめて立ち上がると、空は夕焼けの気配。グラデーションの変化を楽しみながら、今日も
すてきな一日だったと思う。

ふと振り向くと、龍門山は夕焼けに染まりながら、にっ・と笑ったような気がした。

「父の手を解いた朝」

峯田 泰彦

一月、その朝。

私は父を施設に入れた。

それは東日本大震災から十ヶ月後で、秋に定年を控えた私は、復興支援の為に被災地への派遣が打診されていた。

私は認知症が進んだ八十三歳の父を、妻に託して行くことが出来なかった。

故郷で一人暮らしの父を東京に呼び寄せ、五年余り過ごした。この間妻は愚痴を零さず尽くしてくれたが、私は父との同居に疲れ、限界だったのである。

私は妻と話し合い父を施設に入れることを決め、年末には契約を済ませていた。

年が明け、三夜続けて施設に入って欲しいことを告げる度、父は「そうか」と言いながら晩酌の手を緩めなかった。

父は翌日には覚えていなかった。

最後の思い出に、西新井大師へ連れて行くと、父は大勢の参拝者を見て驚いて言った。

「これは、お祭りか？」

「初詣での人たちだよ」

「そうか」

この会話を三度繰り返した。

故郷でこれほど人が集まるのは、神社の秋祭りぐらいだったのだろう。

お参りを済ませ、昼食で熱燗を勧めると、父はすっかり上機嫌になった。

しかし夕方には何も覚えていなかった。

施設入居の朝。

引越業者が自分の部屋から机や筆筒を持ち出すのを見た父は、我が身に何が起きているのかを悟り、

真顔で私に確かめた。

「もう、ここには戻って来られんのだな？」

私は笑い、安心させる様に言った。

「そんなこと無いよー」

私は平然と嘘を吐いたのだ。

私はどんな顔をしていたのだろう……。

父と私を乗せて施設に向かうタクシーは、荒川沿いの道を東へとひた走った。

無言の時は流れ、ふと横を見ると、父は涙を啜りハンカチで目頭を押さえていた。

私は堪らず目を背け、冬枯れの河川敷に目を遣った。枯葉色の景色が移ろう中へ、心を鬼にして凍え

る様な視線を向けたのだ。

父を泣かせてしまった……。

私は親を捨てに行くのだろうか？

私は目を閉じ、「もう引き返せないんだ」と自らに言い聞かせた。

——やがて、遥かに遡る五十五年前の朝が頭を過った。それは私の記憶に残る、最も若い父の姿だったのである。

父は二十八歳、私は四歳だった。

前年に母の不義が元で両親は離婚し、私は母に引き取られたが、母がその相手と再婚後に私を育てられなくなった。

母と連れ合いには私が邪魔だったのだ。

母は私を父に引き渡すことにし、知らせを受けた父が私を迎えに現れた。

私は一年振りに見る父に、「父ちゃん！」と叫んで飛び付いた。

その日、どんな話し合いがされ、最後の晩をどう過ごしたかは知らない。

翌朝。私は母の許を去った。

母は部屋に籠り姿を見せなかった。

残っていた母性の故だったのか？

秋空の下。私は何度も家を振り返った。

そして父に促され手を繋ぎ駅へ向かった。

父と私の再出発の朝だった……。

タクシーは信号で止まり、私たちはそこで下車した。父は一瞬空を仰ぎ背筋を伸ばすと、いつもの表情に戻っていた。

父は私の後から無言で続いた。

施設迄の百メートル程の道を、今度は私が父の手を携えてやれば良かったと思う。

あの朝、私を棄てた連中の許から連れ出してくれた父の手を……。

それは「終の住み処」に向かう、父の最後の旅路だったからである。

私はこの朝、五十五年間繋いだ父の手を解いたのだ。

自宅に戻り父の部屋に入ると、仄かに父の残り香が漂い、一気に虚しさが込み上げた。

翌日。妻が父の様子を見に行った。

意外にも、父は笑顔で語ったという。

「お母さん久し振りだね。何処に行っていたの？　ここは彼女が多くてよー」

父は、機嫌良く介護の女性と買い物に出掛けたそうだ。嫌なことを忘れられる認知症なら、案外幸せかも知れない。

父はどうやら「ショートステイ」と思っていたらしいが、後は施設の人が話を合わせて下さるだろう。

私は嘗ての剽軽な父が戻っていたことを知り、安堵して赴任することにした。

父と私の、新しい旅立ちの朝だった。

「祖父からの電話」

阿江 美穂

今は一人一人が携帯電話を持ちいつでも自由に連絡を取り合えるが、子どもの頃、実家には電話が一台しかなかった。

それは土間の靴箱の上に置いてあり、実家が日用品の卸売業を営んでいたので主に仕事用だった。

だから、子どもが受話器を持つて話していると、周りの大人たちが発する「早く切れ。商売の邪魔や」という空気に耐えきれず、早々に受話器を置かざるを得なかった。

中でもその空気を一番激しく発していたのが、祖父である。

自分が店を築き上げ、「藤原清紙店」と店名に自分の名前を掲げた祖父は家の中では絶対だった。家中に「おじいちゃんには口答えするな」という空気も満ちていた。

その頃の私は、とにかく祖父が原因として生ずる重苦しい空気が腹立たしくて、そんな祖父に屈するものかと勝手に鼻息を荒くしていた。

祖父が言ったことに困惑しているくせに何も言い返さない祖母や母を見ると、頼まれてもないのに祖父に向かつて、

「おじいちゃんの言ってることは、おかしい。間違ってるわ」と言い切った。

しかし、そういうとき祖父は決まって、
「おお、そうこ」と面白そうに笑うのだ。

私は、祖父に間違いを認めさせたいのに、完全に相手にされていない気がして余計に腹が立つてくる。
その上、こうなるといつも母が「もう止めとき」という視線を送ってくるのだ。

すると、「お母ちゃんのために言うたつとんのに」と、怒りの矛先を母にも向けるという有様だった。
その頃の私は、かわいげのない孫で面倒な娘と思われる言動こそが、自分の正義の証のように思っていたのだろう。

そんな私が京都の短大に行くことになり、生まれて初めて実家を離れたときのことだった。

下宿がうまく決まらず、当初は京都の深草に住む叔母の家に居候することになった。そこには、小さな従妹たちもおり、実家を離れた一日目でも「寂しい」という感じはあまりなかった。

その夜に、実家から電話がかかってくるまでは……。

「へえ、家族から私に電話がかかってくることもあるんや……」

不思議な感覚で受話器を受け取ると、母の声がした。

「どうや、やっていけそうか」

と聞く母に、うまくやっていけそうな話をしたと思う。

しかし、子どもの頃からの習い性で「兵庫から京都への電話や。電話代がかかったらアカンし、仕事の邪魔になる」と焦っていると、母が言った。

「あんな、おじいちゃんが話、したいんやて。代わるわ」

「えっ、おじいちゃんが……」

そして、初めて受話器越しに聞く祖父の声。

「おお、よう似たモン同士のケンカ相手がおらんかったら、おじいちゃん、あかんわ。元氣しとけよ。ほな、お母ちゃんに代わるわ」

一方的に言って消えた祖父の湿った声。

代わって出た母の声も、今度は湿っている。

そんなん、アカンワ……。

私は、自分がこんなに胸がいっぱいになっていることに驚いた。

仕事人間の祖父が、仕事抜き電話を私にかけてきた。それも、「お前がいないとあかん」ということだけを伝えて、かけてきてくれたのだ。

その夜は布団にもぐり込んで、声を殺して泣いた。繰り返し繰り返しこみ上げてくる熱い塊を飲み込んで、喉元が痛くなるくらい泣いた。

祖父からの電話で、あんなに反抗していた私でもかけがえのない家族として愛されていたことに気づいてしまったのだ。

いとも簡単に私の正義はポキリと折れて、こみ上げてくるのは今すぐ家族に甘えたいような「寂しさ」だった。

ひと晩、泣いて泣いて泣きながら、祖父の声と言葉を思い返していくうちに、だんだん笑えてきた。似たモン同士は、ないやろ……。

不思議に嫌な気はしなかった。

「寂しさ」を知って、少し大人になったのかもしれない。

祖父からの電話は、後にも先にもその一本きりだった。

それで十分だった。

家族に愛されているという思いと、私が家族を愛しているという思いが消えることはなかったからだ。

「ほうれん草のゆで汁」

井口 元美

私は小学二、三年生の頃から、冬になると手足にしもやけが出来ていた。ピーク時は手をグーに握れない程パンパンに腫れて、辛い思いをしていた。登校時の手袋は、毛糸の手袋からスキー用の手袋へ変わった。それでも指が入らなくなるとミトンの手袋になった。薬を塗り、包帯を指一本ずつぐるぐる巻いてからはめる。母は忙しい中、毎朝私の手と格闘していた。校則では、指が開かないと危ないという理由のためか、ミトン型の手袋は禁止されていた。

初めてミトンの手袋で登校する朝、母は言った。

「着いたら先生に見せないかんよ」

連絡帳には、掃除の水拭きが出来ないことと、ミトンの手袋で登校することが書いてあった。

集合場所へ行くと、通学班のみんなは私の手袋を見て注意した。

「ミトンはいかんのだよー!」

私は恥ずかしくて、しもやけの事をみんなに言えなかった。

先日、同学年のみかちゃんは、手袋はミトンの方が可愛いとか、休みの日しか使えないなどこぼしていた。そのせいか、学校に着くまで言ってきた。

「本当にダメなんだよ。明日は指のある手袋してこーよ」
と、下駄箱の前で念を押した。

「明日は無理だよ……」

私はしぶしぶ「しもやけだから……」と、手袋をめくり、包帯の手を見せた。するとみかちゃんは、ハツとした顔をして去って行った。それからもう何も言わなくなった。

ある日、母が夕飯の用意をしている時、

「あんだ、ここに指入れてみやー」

と、湯気の間からニヤニヤした顔で流し場を指差した。行くと独特な匂いと共に、緑色の透明な汁がボウルの底で蛍光灯を反射していた。

「なにこれ」

「ほうれん草のゆで汁だがね。しもやけに効くんだげな。冷める前に浸けてみやー」

どこで聞いてきたのか、母のいつもの、有無を言わせぬ口調に指を入れた。

「熱っつ！ お母さん！ 熱くて入れれんがぁー」

「ほうかね。でも少し熱いぐらいが、あんだのその頑固なしもやけには効くんだがねー」

母は少し笑いながら、ほんの少しだけ水を足し、かき回して温度をみた。私はまたゆで汁の中へ、そろそろ冷えた指を入れた。でもすぐにチクチクと針が刺すような感覚に、思わずまた手を引いた。

「浸けとかないかんがね！」

母はほうれん草を切りながら、私を手を浸しているか見張っていた。はげる前の風船のような白い指は、ジンジンからドクンドクンと血がお祭り騒ぎをしていた。しばらくがまんしてから赤くなった手を出すと、指は数日経った風船のように、ほんの少しだけしぼんで楽になっていた。薬を塗っても何の変化もなかったその指の、ほんの少しの効き目に母と私は大いに喜んだ。その日から流し場は湯治場となり、良くなるまで毎日お浸しが食卓に並んだ。

そのほうれん草のお浸しは、毎回胡麻と醤油と削り節をかけるだけだったが、日に日に治っていく嬉しさを、おいしいお浸しと共に噛み締めた。

何よりまた、みんなと同じ、指ありの手袋をはめて学校に行けることが嬉しかった。

戦前生まれの母は、たくましく生きる知恵のような民間療法をよく私に試みていた。乾布摩擦が体を強くすると聞くと、冬の朝、布団をはがし背中をタオルでこすった。車酔いに効くと聞くと、バス遠足の朝、おへそに梅干しを貼った。家族のために一生懸命だった母の思い出を手繰り寄せていくと、その時は分からなかった、母らしい愛を今を感じる事が出来る。

私は今はもう、しもやけにはならないが、家族にほうれん草のお浸しを作り、熱い緑色のゆで汁を捨てる時、いつもぶつきらばうに背中を押してくれていた母を思い出し、励まされている。

「親友の服」

西村 美香

小学生のころ、私の一番の親友はカナだった。カナの家は薬局で、薬剤師のお母さんがひとりで店を切り盛りしていた。お父さんは、カナが小さいころに離婚したから、一緒には暮らしていなかった。

小学六年生の冬、年が明け、あと数か月もすれば二人揃って小学校を卒業というときに、カナは今までになく真剣な顔で私に頼みごとをしてきた。

「ミーコに、どうしても救ってほしい服があるの」と。

毎年恒例の年始バザーで、カナの家から出す品物の中に、女の子用のスーツがあるらしい。それを、どうしても私に買ってもらいたいのだという。

「ミーコなら絶対似合うと思う。紺のブレザーに、濃いグリーンのタータンチェックのスカートと、同じ柄のベストもついているの」

私は首をかしげた。

どうも事情がはつきりしないのだが、どうやらカナが手放したくない洋服を、カナのお母さんがバザーに出そうとしているらしい。

「そんなに気に入っている服なら、私がバザーで買ってもらったあとで、こっそりカナに返してあげようか？」と言うと、カナはかぶりを振った。

「いいの。その服、ミーコに着てもらえたらしいの。ちゃんとしたスーツだから、卒業式にどうかなって……」

「ふーん」

謎は深まるばかりだったが、とりあえず私は、バザーでその服を母親にねだってみると約束した。バザー当日、「こっちこっち」とカナに手招きされ、私はその服を初めて目にした。中学校の制服みたいな、かっちりとした真面目な雰囲気のスーツだった。リボンもレースもフリルも、少女がときめくようなものは何一つついていない。ちょっとがっかりしたが、まあいいか、と思った。

店番のおばさんに、お母さんを連れてくるから、それまでこの服は絶対に誰にも売らないで欲しいと頼み、ギフトセットのサラダ油やコーヒーなんかを物色していた母親を無理やり引っぱってきた。

「ねえ、この服を買ってよ」と言うと、「これ？」と母親は意外そうに目を丸くしたが、サイズが私に合っているのを確認すると、すんなり財布を出してくれた。

「あなたが、こんなキリつとした服を欲しがるなんて、珍しいこともあるものね。だけど、卒業式に着る服を準備しなくちゃって思ってたところだったから、ちょうど良かったわ」と、むしろ私は褒められた。その様子をカナは少し離れた場所から見ていた。無事に服を手に入れたと、私が手で合図を送ると、カナは大きくうなずいた。

そのあとしばらくして、私たちは無事に卒業式を迎えた。私はバザーで買ったスーツを着て参列し、カナは二人の記念写真をやたらと撮りたがった。カナのお母さんは、私が着ている服を見ると、ハッと息を飲んで顔をこわばらせたが、特に何も言わなかった。結局、その服は卒業式に一度着ただけで、そ

のころ急激に背が伸びた私の体には合わなくなり、他の服と一緒に従妹へのお下がりとなった。

そのスーツが、カナのお父さんが送ってきたものだったと知ったのは、成人式のために、久しぶりに地元に戻ったときのことだ。

「両親が離婚したのは、お父さんの浮気のせいだったの」とカナは言った。「だから、お父さんに会いたいなんて、お母さんに悪いような気がして、とても言えなかった」

カナのお父さんは、会えなくなってしまった娘に、せめて小学校の卒業式で着て欲しいと、あのスーツを送ってきたのだった。だが、カナのお母さんは絶対に、娘にそんな服を着せたくはなかった。

「バザーに出すけど、良いわね？」と聞かれたカナは、嫌だとは言えなかったという。だが、父親が自分のために心をこめて選んでくれた服を、見知らぬ他人の手に渡してしまうのは、なんともしのびない。「だから必死だったの。とはいえ、何も知らないミコを騙してワケアリの服を着せるようなまね……、本当にごめんなさい」とカナはうなだれた。もちろん、私が怒るわけもない。カナがいつも、卒業式に撮った二人の写真を持ち歩いていたことを思い出し、切なかった。

「もしかしたらね、小学校の卒業式に、お父さんはこっそり来てくれたんじゃないかな、なんて思ったりするのよ。プレゼントした服が着ていないのを見て、ガッカリしたんじゃないかな、とかね……」そんなことを、本当は直接会って聞いてみたいのだけれど、いまだに父親とは音信不通なのだと、二人の子どもを育て上げたカナは嘆息する。私たちは、もはや中年になってしまった。だけど今も、一番の親友だ。

「なじみ客として想う」

藤田 陽一

「こちらへどうぞ」

店に入って程なくして呼ばれ、私は指定の席に座った。カット席の座り心地も店によって違いがあると知ってから、かれこれ三年になる。

「今日はどうしますか？」

「刈り上げでお願いします。だいぶ薄くなってきたので上はあまり切らずに」

「わかりました」

店主からのいつもの問いに私がいつもの答えで返すと、店主はいつものようにうなずいた。「まだそんなに薄くないですよ」と言ってくれたらと思ったりもするが、私の頭頂が砂漠化しつつあるのは紛れもない事実だ。変に取り繕われるより気が楽だった。

とはいうものの、店主はおそらく私の整髪イメージはでき上がっているはずだ。それでもあえて確認するのは、私のような初老の人間でも稀にイメージチェンジする人間がいるということだろう。それに店主と私の仲はまだ三年だ。暗黙の了解まで信頼関係は至っていないのかもしれない——そんなことを考えているうち、私はふと昔を思い出した。

「どうしますか？」「いつもの感じでいいや」

店主と客のこのやり取りを私は幾度となく耳にしてきた。それというのも、私は理髪店を営む両親のもとに生まれたからだ。

そんな私の髪は母親が切ることが多かった。母は、「床屋のせがれがボサボサ頭じゃ恥ずかしい」が口癖だった。だから、髪を切る間隔はどんなに長くても三週間、入学式や運動会などイベントが間近に迫ると、あまり伸びていなくとも無理やり短くされた。そんな母のもうひとつの口癖が、「床屋には定年がないから働けるだけ働く」だった。

一方の父は、仕事に関しては思い入れもなく、やれることを淡々とこなしていた。その代わり、本業の開始前に交通指導員として二十年以上、雨の日も風の日も、少し離れた地域の横断歩道まで自転車を出かけていき、小学生の登校を見守った。我が子には不器用にふるまうくせに、他の子供たちには笑顔で挨拶を交わす、そんな人だった。

仕事のスタイルも真逆だった。男性に混じり競技会に参加していた勝気な母は、客に対しても手際よく進めるタイプだった。それに対して父は、雑談を楽しみながら、ひとりの客にゆっくり時間をかけていた。そんな正反対の二人だったが、あながい阿吽の呼吸で店を営んでいたのかもしれない。

そんな両親だったが、やがて高齢になり、技術的にも心配になった上、母に認知症の気配が出てきた時点で店じまいした。それでも二人とも七十後半まで店に立ち続けていたのだから、還暦で定年退職した私には到底考えられないことだ。

そして、店じまいした後も、私の髪は母が切ってくれた。それもやがて「そこはもう切らなくていい」と頼んでもさらに切ってしまうほど認知症が進み、いつしか私の髪は父が切るようになっていった。

そんな両親も、母が五年前、父が三年前に他界した。両親にとって私は、「最後の客」であり「一番のなじみ客」だった。付け加えるなら、父が他界する数日前、私は髪を切ってもらっていた。だから私は、父にとっては「最期の客」でもあった。

両親の死に装束は、迷うことなく店で着ていた白衣にした。棺の中の寝顔でさえ、仕事着姿が一番似合うと思ったものだ。

空の上には、私が生まれる前からずっと通ってくれていた常連さんもたくさんいることだろう。今頃は夫婦水入らずで常連さんを相手に店開きしているかもしれない——そんなことを考え、ひとりほくそ笑んだ、そのときだった。

「終わりました、おつかれさまでした」

店主に声をかけられ、私は我に返った。

「ああよかった、スツキリしました」そう言くと、店主は嬉しそうに微笑んだ。

この店の雰囲気、かつて私になじみにしていた店とはかなり違うが、三年が過ぎ、随分と居心地が良くなってきた。よし、今度はこの店の「なじみ客」になろう——私はそう心に決めた。そして、頭頂のオアシス化に成功した私は、照れくさそうに微笑みながらシニア割引の料金を払い、店を後にした。

外は風が吹いていた。一時間前よりだいぶん涼しくなった頭を撫でながら、寒風さえ心地よく感じる帰路を、私はひとり急いだ。

「父はハナシカ」

矢鳴 蘭々海

今年で七十九歳になる私の父は、十五年ほど前から歯抜けの歯医者だ。「医者の不養生」という言葉に違わず、自身の歯のケアは放ったらかして診察を優先してきたこともあり、前歯が数本欠けている。当の本人は、仙人めいた白い口ひげでごまかしているつもりらしいが、マスクがなければバレバレの様相だ。

若い頃から酒好きの父は、酔うと親父ギャグを言うのが常で、よくこう言っていた。

「俺は話が上手いから、『嘶家（はなしか）』の歯医者だ。歯がないだけに、『ハナシか？』なんてな！」
歯科診療所の院長である父は七十歳を過ぎても週五日勤務で、朝九時から夜八時まで働きづめだった。当時は家に帰るとへたりこむように食卓に着き、食事の途中で座ったまま寝てしまうことも多かった。家族が診察時間の短縮を提案しても聞く耳を持たないどころか、「俺は診察の途中で死ぬのが本望だから、これでいいんだ」と、開き直るのが常だった。

一昨年に勤続五十周年を迎えてもまだまだ現役に見えた父だったが、昨年の正月に、電車の中で転倒してしまい腰を骨折した。いつときは歩くことも困難となり、私を始め家族は廃業を促したのだが、大好きな酒を断つても父は診療所の継続を望んだ。一年経った今でも、ひどい腰痛に悩まされることがあり、そのたびに臨時休業して自らの治療に専念し、治れば診療再開という流れを繰り返している。た

だし、休診日を一日増やして診察時間も大幅に短縮するなど、父なりに妥協した形だ。

私は現在、父の職場で受付の手伝いをしている。受付で事務をしていると、そばの診察室から患者さんと父が笑い合っている声が聞こえてくる。どれだけ忙しくても、父は患者さんとの世間話をおざなりにはしないのだ。

「院長は歯のホワイトニングしないんですか？」

「そんなのしなくたって、どうせ死んだら全部白くなるから。アツハツハ！」

父の陽気な声につられて患者さんも笑っているが、こっちはまったく笑えない。骨折した腰にコルセットを巻いて床に臥していたときの父は、間違いないあの世に連れて行かれそうなほど顔面蒼白だったからだ。今の診療所にドクターは父一人しかいない。理数系科目が苦手な極度の不器用だった私は、そもそも後継ぎとしては全然向いておらず、実際に後継ぎにはなれなかった。そのことを、四十路を過ぎた今になって後ろめたく思っている。手先の器用な父は麻酔の注射を打つのが実に上手く、患者さんが痛がる光景を見たことがほとんどなかった。打っても痛くないポイントを見極めるのも、豆腐に注入するようにゆっくりと注射するのも、何十年と同じ作業をしてきた父にとっては慣れたものだ。伝統工芸並みに習得時間が必要であり、受け継げば確実に未来の患者さんにとって大きな救いになる技術を、私は受け継ぐことができなかった。そのことを父に謝ると、父はいつもの嘸家口調でこう言うのだった。

「お前は練習しても俺と同じようには打てないだろう。注射じゃなくて、ペンの方がお前には合ってるぞ。人の心を打つにも麻酔の注射を打つにも、何事にもコツがあって、お前は好きなことで頑張ればいい」
そう慰めてくれた父のおかげで、私は趣味の創作を今日まで続けることができた。

先日、私がある絵本の原案コンテストで入選したと知った父は、白い髭から歯無しのお口元をのぞかせて破顔した。

「絵本作家デビューおめでどう！ 俺の棺にはお前のサイン入りの一冊を入れてもらおう」

「そんなことより、いい加減に入れ歯作りや」

父の一段と痩せこけた頬が痛々しくて、つい毒づいてしまい、心の中で反省した。腰椎変性側弯症により、まるでランドセルを背負ったかのように大きく彎曲してしまった父の背中を見て、棺には横向きでないと収まらないのではと、不謹慎な光景が目につかんで慌てて打ち消した。

「お父さんが天国行ったら、先に行った患者さんらが、『また歯を診て』って殺到するね」

「まだ生きてる人も、『虫歯治してもらいたくて死にました』って来るかもな」

「それはないわ」

漫才の掛け合いのような会話をしていると、不安な気持ちが少しだけ和らいだ。父は結局、人に頼られるのが心の底から好きなのだ。

以前、職場にいた研修医に、父は、「名医ではなく、良医であれ」と力説していた。人の心を解きほぐしてこそ、体の痛みに寄り添える。父の話好きも、患者さんをリラックスさせるのに一役買っていると言える。

「歯牙再植用の薬を頭に塗ったら、毛根が再植されて俺もフサフサに戻るかな？」

今日も「ハナシカの父」はくだらないことを言いつつ、患者さんと笑っている。

「私の運命を変えるきっかけ」

片岡 真悠

ぴんとした背筋。凜とした顔立ち。周りの目を引きつける存在感。彼が私の運命を変えるきっかけだった。

桜が散り始めた四月半ば。高校受験に失敗し、第二志望の学校に進学した私は、毎日を抜け殻のように過ごしていた。適当に生活していた。とりあえず姉が高校時代に所属していた弓道部に入った。段の資格を取れたら大学受験でも役に立つと思っただけ。先輩方が弓を引く姿はキラキラしていて眩しかった。それとは対照的に私は弓を引き始めて以来特段楽しいという思いはなく、ただ機械的に練習を続ける日々。しかしあの日見た光景が、私の日常に一筋の光を差した。

碧瑠璃の空。綿菓子のようなもくもくと広がる綿雲。試合の開始時刻が迫っていた。今日は男子の新人戦だ。私はベンチに座り試合が始まるのを待った。目の前には綺麗な緑色で、生き生きとした芝生が広がっている。右側を見ると的がいくつもあり、三つずつに仕切られている。左側を見ると大きな弓道場が佇んでいる。ざわざわとした観客が一気に静まり返った。ふと射場を見ると、選手が入ってきた。選手は大前、中、落ちの三人でわかれる。選手たちは的の方をじっと見つめていた。しかし、一人だけ他の人とは違う雰囲気の方がいた。彼は目の前の的を睨みつけ、真剣な表情をしていた。恐ろしいほどの威圧感。背筋はぴんと伸び、足腰はどっしりとしていて安定感がある。私の目は彼に釘付けになった。

「始め」という声と共に選手たちは射場に入る。足運びも、弓を立てるタイミングも見事に揃っている。そして彼は矢をつがえた。左手で弓を持ち、右手を腰に当てる。じつくりと的を見て集中する。右手で弦を握り、弓をゆっくり上げる。一呼吸おいてから、ギチギチという音と共にゆっくりと弓を引き絞る。力が入っているのか、腕がわずかに震えている。そよ風が彼の周りを取り巻き揺らす。引き絞った姿勢をしばらく保つと「パアン」と音が空気を震わせた。弦から離れた矢は獲物を捉えた鷹のように勢いよく飛び出して行った。矢は的の真ん中を射抜いた。息をするのを忘れていた私は静かにため息をついた。彼を見ると何事もなかったかのように無表情だ。弓を下ろし、ゆっくりその場から離れた。周りの空気が緩んだように観客席がまたざわざわと騒がしくなった。

その日から私は弓道にのめり込んでいった。先輩に教えてもらったり、家でも毎日自主練をしたりした。しかし、どんなに頑張っても思うようにできず何度も心が折れそうになった。そんな時は、私の運命を変えてくれた彼の射を思い出した。私も彼のようになりたいと思うと自然にやる気が出て、より熱心に練習することができた。努力を重ねるうちに少しずつだが、矢が的に中るようになった。中った時は努力が実ったと感じられてとてもうれしかった。

私は彼と出会ってから運命が大きく変わった。抜け殻のように生活することはなくなり、今では毎日生き生きと過ごしている。彼を見て、射は人を変えることができると分かった。私も人を元気づけたり、人の運命を変えたりできるような射を目指して精進していきたい。

奨励賞

東京都板橋区 クラーク記念国際高等学校二年

「当たり前前の歯車を回す」

鏑木 花野

「あなたたち二人で、年末年始にアルバイトをしてみたらどう？」

こういう会話の流れだったか、母はわたしと親戚のわかちゃんにそう持ちかけた。去年十一月下旬の法事の席でのことだ。周りにいた親戚たちも「いいね、やってみなよ」と同調する。わたしたちは「えー、どうしよつか」と八割社交辞令で笑っていた。この話はここで終わりだと思っていた、のに。

十二月になると母は「バイトどうするの？」と盛んに聞いてくるようになり、当事者であるわたしたちよりも求人情報を検索していた。そこで割といい条件のスーパーの求人を見せてもらい、二人して面接を受けたがあえなく不採用。その時にはもう既に十二月十六日。わたしたちはめげずに「面接に来てくれた方九十九パーセント採用！」と銘打つ鮮魚店の求人に応募した。一パーセントに入ったらどうしようねと少し震えながら面接に行くと、何とその日のうちに採用された。わたしは十二月三十日から一月三日、わかちゃんは十二月二十九日から一月一日までの勤務だ。仕事は主に寿司のパック詰め。何だ簡単じゃん、と見くびっていた。

その甘えた考えはすぐに打ち碎かれることとなる。特にバイト二日目、大晦日は一番しんどかった。この日は八時間のシフトだったのに、朝の五時半に起きて餅つきに参加してしまっていたのだ。時間ギリギリに店の厨房に向かうと、もうそこはてんやわんやの大忙しだった。あっけにとられる暇もなく、

仕事を始める。その日の午前中にしたことは一つ、パック寿司を作ることのみだ。外は客といらっしゃいませの声で賑やかなのに、厨房の人々はほぼ無言で寿司を作る。わたしは主にいくら軍艦初期段階（シャリに海苔だけ巻いてあるやつ）にいくらを載せ続ける作業を請け負った。途中で何度も奇声をあげてスプーンを放り投げたい衝動に駆られた。かと思えば沢山のいくらを見て「命だなあ……」と冷静になったりもした。

休憩の後、午後のはじめはわかちゃんとかみをまとめて捨てる作業に逃げた。寒ささえ我慢できれば、厨房にいるよりずっとましだ。トイレにも水分補給にも行ける。ただそれでも疲れは現れる。幾つもの発泡スチロール箱を抱えて前が見えずこけたとき、わたしは笑った。仮にも花の女学生が、大晦日だというのに汚く生臭い格好で、彼氏ではなく（いないけれど）発泡スチロール箱と熱烈なハグをしている。本当に追い詰められると人は笑う——先人の言葉にその時深く頷いた。勤務が終わった時には二人とも疲れきって言葉少なだった。わたしは年越しそばを食べ残し、半醒半睡の状態で年を越した。

次に出勤できたのは一月三日だった。疲れのあまり発熱し、二日間お休みしたのだ。たった三時間半のシフトだけれど、もうわかちゃんはいない。客も働く人も大晦日から激減していた。仕事もあまりない。バイトでハードな仕事をするよりしんどいのは、何も仕事がなくて突っ立ってしまう時だ。仕事は自分で見つけなければどんどん置いて行かれる。わたしは察して動ける方ではないので、間が空くといつも社員さんに「何か仕事ありますか」と尋ねた。恥ずかしいし少しみじめだがなりふり構ってられない。パックのシール貼りやらトレー洗いやらをしていると、あつという間に時間は過ぎていった。「もう上がっていいよ」と社員さんに言われて厨房を去る時、厨房にいた人たちにそれまでで一番大きい声で「お

疲れ様でした。ありがとうございました」と挨拶をした。形だけとは違う心からの感謝だった。それだけのことに自らの成長の喜びを感じて、胸がいっぱいになった。

先日、十二月分の給与が振り込まれていた。一万三千円と少し——多いときのお小遣いに少し上乗せしたくらいの金額だ。すぐに使い果たしてしまうくらいだが、飛び跳ねて喜んだ。

今回アルバイトをして、気付いたことがある。この世は沢山の人が手をかけてくれた仕事で溢れているということだ。例えば今まで当たり前すぎて看過していた、パック寿司の表裏に貼ってあるシール。わたしは初めてそれを貼る作業をして、「そうか、これも手作業なんだ」と気付けたのだ。大抵見られることもなく捨てられてしまうだろうが、それを一生懸命貼っていた人がいるということをどれだけの人が知っているだろうか。生活の中にもそういう仕事はある。定期的に整備される道路、ごみのない公園、時間通り届く荷物。中には、鬱陶しがられる仕事もあるだろう。それでも「当たり前」の歯車を回すために仕事をしてくれている人はみんな尊い。お金のためだけだとしても、働くのは想像以上に大変だ。注目度が低くても、お給料が少なくても、歯車を欠かさないために頑張っている人がいる。すごいことだ。だから改めて働く人全て、そして初めて労働をしたわたしに盛大な拍手と、感謝の言葉を贈りたい。

「いつか必ず言いたい言葉」

滝本 昇生

いつか必ず言いたい言葉がある。それはおじいちゃんの言った「来年もまたここに集まってご飯を食べような」だ。

僕のおじいちゃんは、和歌山市に住んでいる僕の家からうんと遠い「野上」といういわば田舎に従兄弟の家族と一緒に住んでいる。おじいちゃんの家周りの空気は美味しく、小さかった僕にとっては非日常的な場所だった。お正月には家族みんなでそこに行き、みんなで晩御飯を食べていた。おじいちゃんの家から帰るときおじいちゃんは必ずこう言った。

「来年もまたみんなで年明けはここに集まってご飯を食べような」そう毎年言っていたのを僕は鮮明に覚えている。

ある年からおじいちゃんはみんなと一緒に晩御飯を食べることができなくなった。認知症がひどくなり、従兄弟の家族と一緒に住むことが難しくなったのだ。もちろんおじいちゃんが福祉施設に入所してからも従兄弟の家族と一緒に晩御飯を食べたのだが何か足りない気がした。ご飯は美味しい、みんなも優しい、そして楽しい。しかし、何か足りない。

僕は考えた。考えて考えてやっと分かった。あの時の言葉だ。あのたった一つの言葉がないのだ。もちろんおじいちゃんがないというのもある。でも、当時の僕にとってはその言葉は大きかったのだ。

幼かった僕にもそのことはハッキリと分かった。

ある日おじいちゃんのいる施設に行った。おじいちゃんは言った。「今年は行けやんくてごめんな」この言葉もよく覚えていて。僕は来年こそ来てほしいと願った。だが、翌年はさらにおじいちゃんの状態が悪くなり、もう来れそうにもなかった。

その年の年末におじいちゃんは亡くなった。そのとき、小学校六年生だった僕は久しぶりに人の死というものを実感した。その死は三歳の時に亡くなったおばあちゃんの死より強く感じた。

そしてもう一つ強く感じられたものがあつた。

それは、おじいちゃんの言葉だ。

おじいちゃんはその言葉の重みというものを僕に教えてくれた。

「来年もみんなで年明けはここに集まってご飯を食べような」それは僕がおじいちゃんになった時に必ず言いたい言葉だ。

おじいちゃんの教えを心にとめていつか必ず孫に言いたい。

そのために僕はこの忙しい毎日を生きていきたいと思う。

僕の大好きだったあのかつこいいおじいちゃんのようになりたいから。

「引っ越し」

牧野 乙葉

夕食の席で私が大好物の餃子を口に入れようとした時、母が思い出したように言った。

「家を建てることにしたから。引っ越しの準備、しておいてね」

思わず箸から餃子を落としかけた。隣に座っている兄の反応を横目で見たが、特に驚いた様子はない。どうやら、この話を知らなかったのは私だけだったらしい。

私たち家族は父が単身赴任のため、母、兄、私の三人暮らしだ。今のアパートに住み始めてからもう十年になる。壁にはあちこちに画鋲を刺した跡が残っていて、すり減ったフローリングもどこか体に馴染んでしまっている。この家から離れる想像がつかない。引っ越しという大イベントに胸が高鳴ったものの、少しずつ不安な気持ち広がっていくのを感じた。

翌日から引っ越しの準備が始まった。母はちょうどいい機会だと言って、押し入れの奥に眠っていた小さなテーブルを処分することに決めた。ゴミ置き場に行く用事があった私は、それを持って家を出た。寒さが身に沁みるこの時期にサンダルを履いて出たことを後悔しながら、足早にゴミ置き場へ向かう。その途中、向かいのアパートに住む外国人の奥さんと会った。普段は会釈を交わす程度だが、その日、彼女は初めて私に声をかけてきた。

「ソレ、ステマスカ？」

片言の日本語だった。彼女は私が持っている小さなテーブルを指さしている。そして、捨てるのであれば譲ってほしいと続けた。少し考えたが、確かに捨てるのはもったいない。私が笑顔で手渡すと、彼女も嬉しそうに微笑んだ。そして、また片言の日本語で「アリガトウ」と言いながら軽く頭を下げた。

その日の夕方、家のインターホンが鳴った。玄関のドアを開けた母の驚いた声が響く。気になって様子を見に行くと、そこにはあの奥さんが立っていた。彼女は私を見るとまたにっこりと笑って、手に持っていた小さな包みを差し出した。テーブルのお礼に彼女の母国のお菓子を持ってきてくれたのだ。素朴で可愛らしいそのお菓子に、何とも言えない温かさを感じた。玄関先での立ち話は短かったが、とても興味深いものだった。片言の日本語で語られる母国での暮らし、日本にきた経緯、そして彼女の家族の話、どれも新鮮で魅力的だった。私たちが引越すことを伝えると、少し寂しそうな表情を浮かべたが、すぐに笑顔で「ガンバッテ」と言ってくれた。

その夜、私はダンボール箱に囲まれながら彼女がくれたお菓子を一口食べた。それからまたひとつ、箱に荷物を詰めた。今までの生活との別れは不安でいっぱいだが、あの「ガンバッテ」という言葉が背中を押してくれる気がした。

「そのコーラ」

宮崎 純大

そのコーラは、祖母が買ってくれたものだ。祖母、といっても、血のつながりは、ない。母は僕が小学生のときに、それまでひとり僕を育ててくれた父と結婚をして、僕の母となった。だから当然僕は母と、そして母の母と、血は共にしていない。

母のことをお母さん、母さん、おかん、ママ。いずれの呼び方もまだしていないし、出来ていない。初めて会ったときからずっと母の名前にちゃん付けで呼んでいる。

祖母をおばあちゃん、とも呼べていない。いつか自然と呼べるときが来るだろうか。

「それ、買っておいだから。飲みよ」

祖母はそう言いながら、コーラを僕に手渡してくれる。祖母はなぜ、僕がコーラを好きなのを知っているのだろうか。僕から直接、祖母に伝えたことはない。では母が祖母に話したのだろうか。いずれにせよ、祖母の家へ行く度に僕はコーラを飲むことが出来ている。

「コーラはたまに飲むのは良いけど、あまり飲みすぎるなよ。水にしときなさい」

父が口にする言葉である。しかしそう言う父も、お風呂上りにコーラを一杯、爽快な表情をつくつて飲み干していることがある。

先日、僕の誕生日の日。二リットル、ペットボトル十二本の水が届いた。祖母からだった。父が祖母に言ったのだろうか。

「コーラも良いですが、水もお願いします」

いや、どうも考えにくい。では母だろうか。わからないが、祖母からの今年の誕生日プレゼントは、よく行くスーパーでは売られていない、体に良いと評判の水だった。

先にも述べたが、僕と祖母に血のつながりは、ない。父と母が出会わなければ、お互いにその存在すら知り得ない、まったくの他人だった。

人とのつながりは、とても不思議なものだと思う。それが偶然か、それとも何らかの意味があるのかは、随分と後にならないとわからないのかも知れない。

母と最初に出会った日、祖母の家に初めて行った日。どちらもはつきりと覚えている。母と祖母は、よく似ていた。二人とも、すこし緊張していた僕をすんなりと受け入れてくれた。母も祖母も言葉が厳しいところがあるが、心の根っこはやさしくて、とてもあたたかい。それは血のつながりであるのだろうし、祖母に育てられた母が教え受けたものでもある。

僕はこれからも母に、多くのことを教わるだろう。母は僕のこと知らないことがある。たとえば僕が生まれた日のこと。たとえば僕が保育園にうまくなじめず、困っていたこと。でもこの先の人生は、大人になるまで、母が僕のことをいちばんよく理解してくれて、心強いサポーターになってくれるのだ

と思う。もちろん父の支えも大きいが、男同士は何だか妙に抵抗というか、照れくさいときがあるものだ。祖母のやさしさは、僕のくよくよした部分を繊細に気に留めてくれながらも、笑い飛ばす強さを併せ持つもので、

「ああそうか。そういう風に思えば良いのか」

という新しいものの見方や考え方を与えてくれる。

やさしさのかたちは人それぞれで、表し方もまた人によって違うものだ。祖母の僕へのやさしさは、いつも用意してくれているそのコーラと、誕生日の水によっても語られているのだと思う。

血のつながりはときに大きく、信頼関係に影響するのもかも知れない。しかし血はつながらずとも、愛情を示し、与え、受け取り、絆をつなぐことが出来る。祖母の家でコーラを飲むとき、僕はそんなことを考えている。

「日本のアマルフィにて」

宮本 紗希

「古代魚じゃないの？」

そこで販売されていた巨大な物体を見て、私は思わず声を上げた。場所は和歌山市の雑賀崎漁港。ここではとれたての新鮮な魚を漁船から直接買うことができる。休日に母に連れられて、もう何年もここに通っている。今までに真鯛、黒鯛、ヒラメ、イトヨリ、カマス等色々な種類の魚を見てきたが、初めて見る魚体だ。漁師に尋ねると、

「今まで獲れたことがない。名前も食べ方も分からない」

と言われたものだから、母とその魚を買うべきか思索していた。そこへ通りかかった男性が、「ヒラスズギじゃないかな、高級魚だよ」と教えてくれたので、母は即決で購入を決めた。通常はビニール袋に魚と氷を入れて渡されるのだが、サイズは百センチ位、重さは十キロ程ありそうな巨体であったためか、和歌山市指定家庭用ごみ収集袋に入れて渡された。母に車まで運んでほしいと頼まれたので、仕方なく胸に抱えるようにして歩いていると、買い物帰りの人々に物珍しそうに覗き込まれたり、近くにいた漁師にクスクス笑われたりした。

やっとの思いで謎の魚を持ち帰ると、今度は解体作業である。我が家は各自の担当が決まっている。作業を丁寧に行うことが得意な私は、ペットボトルのキャップを使ってひたすらうろこ取りをする。次

に臭いに耐性のある母が内臓を取り、器用な弟が三枚におろしていく。驚いたのがこの魚の今までに見たことのないほどのうろこの大きさである。それを見て、我々はとんでもないものを持ち帰ったのではないかと思えてきた。

悪戦苦闘の末、大量の魚の切り身が出来上がった。さすがに刺し身で食す勇氣を持ち合わせた者は誰もいなかったため、話し合いの末、無難な塩焼きにすることにした。結論から述べると、この魚は少々グロテスクな見た目に反し、非常に美味であった。白身で上品な味がした。

後日、和歌山県立自然博物館を訪れる機会があった。携帯電話で魚の写真を撮っていたので、学芸員の方に魚の名前が分かるか尋ねてみたところ、非常に興味を持たれた。しかし、残念なことに台所の流し台で撮った写真は、魚が巨大すぎて全体が写り込んでいなかった。断言はできないが、スズキ科ではないと思われる。というのが学芸員の方の結論であった。では、あの魚の正体は何であったのか。私の考えでは、「美味しすぎる古代魚」が正解ではないかとみている。

珍しい出会いのあった雑賀崎は、日本のアマルフィと呼ばれるようだ。インターネットで調べてみると、港周囲の丘陵部に家々が建ち並ぶ風景が、イタリア南部の「アマルフィ海岸」に似ていることからそう呼ばれるようだ。私はイタリアに行ったことはないし、似ているかどうかよく分からないが、晴れた日にここから眺める景色はとても美しいと感じる。市内からあまり離れていない場所に、このような美しい港町があるなんて、和歌山の自慢のポイントだ。

「最近、鯛が獲れなくなった」「昔と比べて、獲れる魚の種類が変わってきた」などと心配な話を聞いた。こんな所にも地球温暖化が関係しているのかと、難しいことは分からないが漠然とした不安を

感じる時がある。願わくは、これから先もずっとここが変わらない場所であってほしい。人の心も自然も穏やかで温かい、それが私の暮らす故郷だから。

奨励賞

静岡県磐田市 角川ドワンゴ学園N高等学校一年

「笑顔を一緒に食べている」

横山 綾乃

「えっ？ お米なの？」

まん丸に見開かれた友達の瞳。私は友達からの問いに「うん。お米だよ」と答える。

朝、昼、晩と三食。それが毎日続いても飽きることはない特別な食べ物。ほどよい甘みと柔らかさが絶品で、どんなおかずでも相性は抜群。

お米以外に、そんな食べ物はあるだろうか。

「そうだねえ。女子高校生の好きな食べ物がお米って渋いかもね」

私の好きな食べ物がお米と聞いて、友達が驚いていたよ。そう話すと、母はにこにこしながら言った。確かにチョコレートやグミのような甘いお菓子や、こってりとした厚みのあるチャーシューの乗ったラーメン、一口食べれば異国の気分になるピザも美味しいと思う。

でも私にとってはお米が一番だ。「美味しいから」というのはもちろん、お米は私にとって「笑顔になる魔法」だから。

私が幼い頃、休みの日はいつも家族でお出かけをしていた。

近くにある公園や、海。晴れ渡る空の下で、父と母はいつも一緒に遊んでくれた。

「よし、お昼ご飯食べよっか」

外出中、私が「お腹空いた」と言うとお母がそう言って、袋からおにぎりを出してくれた。母のお手製であるおにぎりの具は梅干しやおかかが入っていて、口の中にほどよい塩味が広がる。

「美味しいね！」

私がおにぎりを食べながら言うと、

「良かった」

と笑う両親。

レジャーシートを広げて、自然溢れる場所で食べたおにぎり。潮風で舞う砂からおにぎりを守りながら食べた思い出。

お出かけにはいつも家族と、お米がいた。

「私もおにぎり作る！」

ある日、母がおにぎりを作る準備をしているところを見て、そう言ったのを覚えている。

「じゃあ一緒に作ってみようか」

母はにこっと笑っておにぎりの作り方を教えてくれた。

まずは手を洗って、ちよっただけ手の平を水で濡らしておく。そこに塩を少しだけ振ってお米をのせる。好きな具を入れて、あとは握るだけ。子どもの私でもできそうな簡単なレシピだった。

ところが、上手く握れない。小さな手では、母のように綺麗な三角形を作ることではできなかった。丸……

とも言い切れない歪な形をしたおにぎり。握る力が弱すぎて、途中でボロボロと崩れてしまう。それでも母は私を作ったおにぎりを見て「上手、上手」と言ってくれた。

母のような三角形のおにぎりは作れなかったけれど、それでもなんとかお米を握った。
そしてお昼。

「いただきます」

私が作ったボロボロのおにぎりを母が食べる。

「美味しい！　すごく美味しいよ！　作ってくれて、ありがとう」

母がとびきりの笑顔でそう言ってくれた。

私もおそろのおそろの自分で作ったおにぎりを食べてみた。

——美味しい。

三角じゃないけど。ボロボロだけど。

ちゃんと、おにぎりだった。

このおにぎりが、私が初めて作ったご飯だった。

それから私が落ち込んでいたり、辛いことがあったりすると「おにぎり作って一緒に食べよう」と母が言ってくれた。このお米の一粒一粒が、私の中で栄養になって私と一緒に生きているんだと思うと、少しパワーが湧いてくるような気がした。

お出かけをする日も、しない日も。雨の日も。私は母と一緒におにぎりを作って食べた。だんだん私の作るおにぎりも三角形になってきて、少しずつ上手になってきた。

お米は笑顔になる魔法だ。

悲しくても、寂しくてもお米を食べると元気がでる。

「美味しいね」と笑い合つて、「作ってくれてありがとう」と笑顔になる。
お米を食べると、そんな笑顔の思い出が蘇る。

今は私が時々、おにぎりを作っている。

数年前、母は病気を患い、手に力が入らなくなった。

いつも私を笑顔にしてくれた母。

今度は私が母を笑顔にしたい。

だから、お米さん、協力してね。一緒にお母さんを笑顔にしようね。

そんな風に、心の中で語りかけながら今日もおにぎりを作る。

第2回 有吉佐和子文学賞

概 要

■応募資格

中学生以上

■募集内容

エッセイ

※テーマは問いませんので、ご自由にお書きください。

■応募方法

郵送、持参またはメールのいずれかで応募してください。

- ・郵送または持参の場合は、作品に応募用紙を添付してください。
持参される場合は市役所閉庁日を除く、平日8時30分から17時15分の間に市役所10階文化振興課の窓口へ直接お越しください。
- ・メールの場合は、件名を「有吉佐和子文学賞」として、作品を添付し、本文に応募用紙と同じ内容を記載してください。

■応募締切

令和7年1月31日（金）

- ・郵送の場合 必着
- ・持参の場合 17時15分まで
- ・メールの場合 当日受信分

■賞

入賞は最優秀賞1編、優秀賞1編、佳作5編、奨励賞若干数とし、入賞者には、表彰状および副賞として以下の各金額相当の図書カードを贈呈します。

最優秀賞	1編	50,000円
優秀賞	1編	30,000円
佳作	5編	10,000円
奨励賞	若干数	5,000円

※審査結果により、該当作品がない場合があります。
※奨励賞は中学生および高校生の作品のみ対象です。

■発表

入賞者に直接通知するとともに、和歌山市ホームページで5月中旬頃に結果を公表する予定です。

※入賞作品発表時には、氏名および居住地（市町村まで）を公表します。（中学生および高校生の方は学校名、学年を公表します。）

■選考

有識者等からの意見聴取を経て、受賞作品を決定

【意見聴取員】

恩田 雅和	有吉佐和子記念館 館長
河野 和憲	情報通信業（出版業）
坊 美生子	有識者
中村 祐佳子	教育研究会国語部会

※職域は意見聴取当時のものです。

■応募規定

- ・応募は1人1編に限ります。
- ・A4判400字詰め原稿用紙を使用し、縦書き2枚以上5枚以内で作成してください。パソコン等で執筆される場合はA4判用紙に20字×20行の縦書き2枚以上5枚以内で作成してください。
- ・原稿用紙の1行目に「題名」を記載し、2行目から「本文」を書き出してください。原稿用紙には題名と本文以外は記入しないでください。
- ・下記応募用紙に、応募作品の題名、氏名、住所、電話番号、生年月日、E-mailアドレス（お持ちの方）、中学生および高校生の方は学校名・学年、今回の募集を知った方法を明記のうえ、作品に添えて提出してください。
- ・団体でご応募される場合は、和歌山市ホームページにある、団体用応募用紙および応募添付書に必要事項を記入し、ご応募ください。
- ・作品は日本語で書かれた本人のオリジナル作品で、未発表のものに限りします。AI（人工知能）文章生成ツールによる作品、他人の作品等を流用した作品は選考対象外になります。
- ・第三者の権利を侵害する作品、第三者を誹謗中傷する作品の応募は不可とします。
- ・他の文学賞との二重投稿および過去に入賞した作品の応募は禁止します。

■応募上の注意

- ・応募後の作品の変更・差替えは認められません。
- ・応募作品の返却はいたしません。
- ・入賞作品の著作権は和歌山市に帰属し、和歌山市ホームページやSNS等に掲載する場合があります。
- ・選考に関するお問合せには一切お答えできません。
- ・作品の到着確認のお問合せには対応できませんので、郵便の追跡サービス等を利用し、各自でご確認ください。
- ・応募に関する個人情報「有吉佐和子文学賞」に関する業務以外では使用しません。
- ・募集要項に違反した場合は、受賞後であっても賞を取り消す場合があります。

■応募先および問合せ先

〒640-8511

和歌山市七番丁23番地

和歌山市文化振興課

有吉佐和子文学賞係

Tel：073-435-1194

E-mail：bunkashinko@city.wakayama.lg.jp



▲ホームページ

■応募状況

応募総数 1,512編

中学生は個人応募を含め、市内6校、県外8校から応募があり、高校生は個人応募を含め、市内3校、県内2校、県外14校から応募があった。

年齢別では、10代からの応募が最も多く651人であり、全体の約4割を占めた。90代まで、すべての年代の方から非常に多くの作品応募があり、最年少は中学1年生、最高齢の方は93歳の方であった。

47都道府県すべてから応募があり、海外からの応募はオーストラリアからであった。

■応募数内訳

応募区分		和歌山県内			他府県	海外	未記入
		市内	市外	県合計			
一 般	865人	69人	53人	122人	737人	1人	5人
高 校 生	419人	3人	28人	31人	388人	0人	0人
中 学 生	228人	129人	0人	129人	99人	0人	0人
合 計	1,512人	201人	81人	282人	1,224人	1人	5人

■年代別内訳

年代	人数
10代	651人
20代	64人
30代	75人
40代	102人
50代	132人
60代	204人
70代	174人
80代	65人
90代	4人
未記入	41人
合計	1,512人

■地域別内訳

地域	人数
北海道・東北	54人
関東	667人
中部	116人
近畿	494人
中国・四国	128人
九州・沖縄	47人
海外	1人
未記入	5人
合計	1,512人

■表彰式

日時：令和7年6月1日（日）13時30分から

会場：和歌山市立有吉佐和子記念館

第2回 有吉佐和子文学賞 入賞作品集

編集・発行 和歌山市

〒640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23番地

TEL 073-435-1194